

『賃労働と資本』を学ぶ

第7回 四国ブロック

資本とは何か②

前号では3章「資本とは何か」の、
①資本とは何か（P 56・7行目〜P 58・2行目）についてレポートと討論を行いました。今回は②資本の本質（P 58・3行目〜P 60・9行目）について行います。

司会 前回に引き続きレポートは香川県協のMさんです。よろしくお願ひします。

すべての生産物は商品

M 資本もまた一つの社会的生産関係

であると言います。それは一つのブルジョア的生産関係であり、ブルジョア社会の一生産関係であるというのです。

私たちは資本とは、投下する原資のお金であると思っている人が多いと思いますが違います。資本とは、生活手段、労働用具、原料という物質的生産物だけから成り立つのではない。諸交換価値から成り立っている。この諸交換価値から成り立つというのがミソです。資本を構成する生産物は全て商品であり、いろいろな物質的生産物の一総量であるだけでなく、諸商品、諸交換価値、社会的な大いさの一総量です。羊

毛を綿花と置き換えても、両者が同じ交換価値、同じ価格であれば資本は同一不変であるということです。

しかし各資本は、諸商品すなわち諸交換価値の一総量としても、それが全て資本だということではありません。その諸交換価値の各総量は一つの交換価値ですが、その逆もしかりなのです。司会 日本文では次の例を用いて説明していますね。「千マルクに値する一軒の家は、千マルクという一交換価値である。」とテキストにあります。これはどういうことですか。

M 千マルクというお金で交換できる

一つの商品として、千マルクの家があるということだ。

司会Ⅱでは「一ペニヒに値する一枚の紙は、百分の百。ニヒという諸交換価値の一総量である。」とは何ですか。

MⅡ百分の一。ペニヒというお金が百集まれば、一ペニヒの紙と交換できるといふことです。他の色々な生産物と交換できる生産物が商品であり、互いに交換される一定の比率は、それらの生産物の交換価値を表し、貨幣で表せばその価格を形成します。

これらの生産物の量は、「商品であり、一つの交換価値であり、あるいは一定の価格を持っているという」これらの規定を変化させるものではありません。量にしたがって、小さきままな価値を持ち、高きままな価格を持つ一商品であるのです。

資本の本質

MⅡでは、いかにして諸商品、諸交換価値の一総量が資本となるのかということが問題になってきます。自立的な社会的な権能（権限）として、すなわち社会の一部の成員の権能（権限）として、直接の生きた労働力との交換によつて、また自らを維持し、増やすことによつてであり、労働能力のほかにも持たない階級が存在していることが、資本の必要な一前提になるのです。

司会Ⅱ労働者階級の生きた労働が加わり、新たな価値を増やすことによつてのみ資本は増殖される仕組みなのですね。

MⅡ蓄積された、過去の、対象化された労働が直接の生きた労働を支配することによつてはじめて、蓄積された労働が資本となります。資本を増殖させるべく行われる現在の生きた労働のために、「蓄積された労働Ⅱ資本」が必

要になる。そして資本増殖のためには過去の労働が不可欠になります。

司会Ⅱわかりやすく言えば、過去の労働によつてつくり出された機械を用いて、現在の生産活動Ⅱ労働がなされ、資本は増殖していくことですね。

MⅡ資本の本質は、「蓄積された労働が生きた労働にとつて新しい生産の手段として役立つ」のではなく、「生きた労働が蓄積された労働にたいし、その交換価値を維持し増加する手段として役立つ」ということなのです。

資本も一つの社会的生産関係

司会Ⅱそれでは討論に移っていきましよう。

YⅡここでは、資本というのは歴史的な経過を経て生まれてきたものであるということが主たるテーマになると思います。3章の冒頭でブルジョア経済学者が言ったことを再びここで取り上

◆みんなの学習講座

げて説明しています。彼らを考えに疑問を投げかけるように書いています。

資本は、社会的生産関係であり、生産関係のなかで考えなくてはならないということです。

司会 II 今説明されたように、経済学者が言った資本の説明を再度取り上げて、そうではないのだというように、ここで言っているわけですね。マルクスが訴えたいのはどこになるでしょうか。

Y II 生活手段や労働用具、原料、貨幣というものは、一定の生産関係の中に組み込まれて初めて資本となりうるということですね。そこが訴えたい部分かと思えます。

司会 II それでは次のところで「資本を構成する全ての生産物は商品である」とテキストに書かれています。つまり商品もまた一定の諸関係のなかで商品となり得るのであって、商品があつて初めて資本が成り立つということではないですか。

Y II 言い方を変えると、生活手段や労働用具、原料などもまた商品であるということ、商品であるからこそ交換価値を持っています。本文では、「資本は、生活手段、労働用具、原料だけでなく、交換価値からも成り立っている。資本を構成する生産物は全て商品であり、いろいろな物質的生産物の一総量であるだけでなく、諸商品、諸交換価値、社会的な諸量の一総量である。」とあります。

K II つまり資本は交換できるものしかつからないということですね。社会的分業のなかで、例えばネジ一本だけ見れば本当に商品として成り立つのかわからないけれども、その一本が、飛行機など社会的に必要なものを構成するのに必要であるという、紛れもない商品であるということですね。

Y II 確かに交換を必要としている商品という意味もありますね。

H II 結局資本主義社会の生産のなかで

は、生活手段や労働用具、原料など全てのもので交換できるもの、つまり商品であつて、それらは社会的分業によつてつくられて、それらを基に一つの大きな商品がつくられます。ここでは表現として「諸く」というようにたくさん出てきますが、資本は生活手段や労働用具、原料一つひとつ個別でもあり、また総体としてもそれは資本であるということだろうと思います。

社会的な大いさとは

司会 II 次に総量という言葉が出てきますね。

Y II 他のテキストでは総和とも書かれています。全てを合わせたものということですね。

司会 II 社会的な大いさというのはどういうことでしょうか。

K II いわば経済的な大きさとでも言うのではないかと思います。

◆特集 みんなの学習講座

司会Ⅱ「ここで「資本は物質的な諸生産物の一総量だけではなく、諸商品の、諸交換価値の、社会的な大きいの一総量である。」と、3つが書かれています。ですが、どういうことでしょうか。

KⅡ3つの言い方はしていますが、同じことだと思います。社会的に商品が生産されたり、交換されたりするなかで、それが全体でその社会の大きさを表すということです。

TⅡそうならば、例えば結果的に交換されない商品は、この総量から除かれるのでしょうか。

YⅡ交換されない時点で商品とみなされず、無駄なものということになるので、除かれると思います。

TⅡ市場に出た時点で商品の交換価値はどうなっていますか。

YⅡ結果売れないと、価値を表現できていないので、交換価値がないものになります。売れないものは市場に出すような資本家はいないでしょうか。

司会Ⅱ「そうですね。前もって売れないと分かるのでしょうか。市場に出して初めて売れるか、売れないかわかるのではないですか。

HⅡ「ここでは、社会的な大きいことから、交換され価値を表現できる前提での話です。前回学習した、生産力と生産関係によって社会が形作られるというところがありました。まさにそれがこの社会的な大きいではないかと思えます。

YⅡ「そうですね。生産力と生産関係という生産諸関係が発展してきたことで社会が変化してきたことを考えると、それが大きくなり、発展してくるということでしょうか。

HⅡ「先ほど社会的な大きいさは、経済的な大きさとすることで表現されましたが、いわば社会の土台部分の大きさということではないでしょうか。YⅡ別のテキストでは大きいところ、諸量と表現されています。諸商品、

諸交換価値などの一総和ということですね。

諸交換価値の各総量は

一つの交換価値

司会Ⅱ「それでは次に「だが、各資本は諸商品すなわち諸交換価値の一総量」としても、それが諸商品・諸交換価値・各総量が資本ではない。」というところから進めていきましょう。ここでまたややこしくなってきましたね。IⅡ「諸交換価値の各総量は一つの交換価値である。」というのでしょうか。

YⅡ「例えば、ペットボトルのジュースには1本ごとに交換価値があります。それが千本になったら千本分の交換価値になります。それと同様の交換価値がある、例えば100冊の本があれば、互いに交換できるということです。

IⅡ「同様の交換価値がある物なら、交

◆みんなの学習講座

換できるということですか。

H II この例で示されているように、「千マルクの価値を持つ一戸の家は、千マルクの額の一つの交換価値である。」というのは、千マルクというお金で交換できる一つの商品として、千マルクの家があるということです。「一ペニヒの価値を持つ一枚の紙は、百分の一ペニヒを百倍した額の諸交換価値の一総和である。」というのは、百分の一ペニヒというお金が百集まれば、一ペニヒの紙と交換できる。ということです。

K II 1個1個は交換価値が違って、一定の比率によって価値が同じになれば交換できるということ。すなわち、I II なかなか整理がつかみませんが、分かりました。

自立する社会的な権能とは

司会 II 「ではいかにして、諸商品・諸

交換価値・の一総量が資本となるか？」というところに入っていきますよ。「自立する社会的な権能として、すなわち社会の一部分のものの権能として、直接の生きた労働力との交換により、みずからを維持し増殖することによってである。労働能力以外に何も持たない一階級の生存は、資本の必要ない前提である。」とあります。T II 権能という言葉の意味を教えてくださいませんか。

M II 辞書で調べてみると、「法律上行使できる能力」ということのように、私は権能というほうが理解しやすいかと思えます。

Y II 「自立する社会的な権能」とはどのようなことでしょうか。

K II 次の「すなわち社会的の一部分のものの権能として」というのは、これは資本主義を揶揄しているのですかね。H II 社会的な権能といいますが、実際は資本家の権能ということでしょうか。

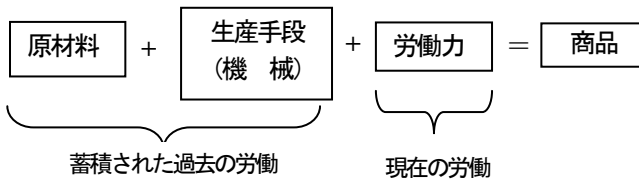
Y II ここで書かれていることは、資本主義が自立したということです。つまり資本が拡大再生産という自立運動をできるようになり、そして社会全体を動かしていく力になったということ。すなわち、全ての生産物を商品として生産する資本主義という社会制度が確立したということですね。

K II それには、生きた労働が、加わることで初めて資本となる。

Y II そうです。忘れてならないのは一階級の生存、労働者の生存です。資本の増殖には、労働能力のほかに何も持たない、いわゆる生産手段から切り離され、自身の労働力を売ることしか生存できない階級の存在が必要なのです。そして最後に、資本の本領、つまり資本の本質について書いています。

資本の本質とは

司会 II 蓄積された労働が生きた労働に



とって新しい生産の手段として役立つのではなく、生きた労働が蓄積された労働にとつてその交換価値を維持し増加する手段として役立つということなのですが、理解できますか。
MⅡ蓄積された「過去の労働」、直接

の「生きた労働」とは何かということですが、みなさんどうでしょう。

司会Ⅱ前回、「過去の労働」、「現在の労働」ということで学びましたね。おそらくしてみましょう。青年部のみんなはどうですか。

AⅡ「蓄積された過去の労働」とは、原料や機械のことだったですね。「生きた労働」とは過去の労働に働きかける労働者、労働力でしょうか。

YⅡ今出された、原料や機械を用いて新たなものを作っていくわけですが、それら原料や機械についても、それをその前につくった労働者がいるということです。過去の労働ですね。それを用いて現在の労働が、さらに新しいものを作っていくということです。

司会Ⅱ「過去の労働」と「生きた労働」について復習ができましたね。

YⅡ最後に書かれています「その交換価値を維持し増加する手段として」というところの、その交換価値を維持

し、というのは何をさすのかです。過去の労働でつくられた原料や機械の価値を、生きた労働に移転するということです。そして、増加する手段としてというのは、同時にその新しい生産によって価値を増加させるということです。

司会Ⅱ過去の労働を1、生きた労働を1とすると、1+1=2ですが、それをさらに2以上にしていくということですね。

YⅡ生きた現在の労働で、労働者の賃金加わります。つまり過去の労働の価値が移転されて、現在の労働でさらに剰余価値が加わるといことです。

司会Ⅱ資本の本質は、生きた労働が蓄積された過去の労働に対して、その交換価値を維持し増大する手段として役立つということを、しっかり押さえておきましょう。それでは3章「資本とは何か」②資本の本質の学習と討論を終えていきます。